# 音楽科における演奏技術向上を目指した取組

## ～スモールステップで身につける、演奏する力～

徳島県立徳島視覚支援学校　教諭　仁木　悦子

1　はじめに

本校は、2014 年に徳島視覚支援学校へと校名を変更し、徳島聴覚支援学校と併置され、同一校舎で学んでいる。校名変更から 10 年目を迎え、今年度は幼児児童生徒 20 名が在籍している。現在、音楽の担当者は校内に一人のため、小学部から高等部まで全クラスの音楽の授業を担当している。

特別支援学校高等部学習指導要領（平成 31 年２月告示）には、音楽の目標として「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しんでいく態度を養い豊かな情操を培う」ことが示されている。このことから、「音楽活動の楽しさを体験すること」が音楽に関する力を育てるためにとても重要であり、その体験をすることによって、音楽に対する興味・関心が広がったり、生活の中で音楽を愛好し続けることに繋がったりすることが考えられる。

2　テーマ設定の理由

取組の対象となった高等部２年生の生徒２名については、小学部３年生時から継続して音楽の授業を担当している。小学部３年生時には、対象生徒２名とも「音楽を聴くこと」、「歌を歌うこと」、「太鼓等の打楽器を演奏すること」が音楽活動の主であり、旋律を演奏する楽器にはまだ取り組んでいなかった。特別支援学校小学部学習指導要領（平成２１年３月告示）音楽の目標には、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽についての興味や関心をもち、その美しさや楽しさを味わうようにする」ことが示されている。そして３段階（３）には「旋律楽器に親しむ」ことが記されている。私は常々、音楽の授業で身に付けたことを生かして、卒業後も自分たちで音楽を楽しんで欲しいと考えている。対象生徒が音楽を聴いたり歌ったりするだけでなく、旋律楽器の演奏ができるようになることで活動の幅を広げることができ、それによって生徒たちが音楽活動の楽しさをこれまでよりもさらに多く体験できるのではないかと考えた。

演奏する楽器の選択については、リコーダーの開始時期である小学３年生であること、個人で所有しやすく卒業後も身近に置いておける楽器であることからリコーダーを選んだ。生徒たちはそれまでに、吹き戻し笛や和音笛などを吹いた経験があり、「吹いて音を出すこと」については特に抵抗なくできた。しかし、指穴を押さえて吹くことに関してはこれまで経験がない状態だった。また、新しいことを受け入れたり定着させたりするには、丁寧な指導や長い時間が必要であるため、まずは１音を吹けるようにすること、そしてそこから少しずつ音を増やしていくことで、旋律を１人で演奏することに繋げていきたいと考えた。

3　生徒の実態

対象生徒２名は、視覚障がいと他の障がいを併せ有しており、現在高等部普通科２年生である。取り組み開始（小学部３年）時の、音楽の授業における各生徒の実態について示す。

（1）生徒Ａ

- 全盲
- 発音が非常に不明瞭であるため、言葉を発することに苦手意識を持っているが、歌いたい気持ちは強い。
- 教員の合図を聞きながら、簡単なリズムを太鼓等で叩き続けることができる。
- 手指の感覚が鈍く、リコーダーの穴を塞げているかどうか気付きにくい。
- 口周りの感覚の鈍さがあり、唾液も多いため、鍵盤ハーモニカやリコーダー等の吹く楽器を演奏する時に妨げとなることがある。

（2）生徒Ｂ

- 光覚
- 小柄な体格であるため、ソプラノリコーダーや鍵盤ハーモニカ、大太鼓等では大きすぎたり力が足りなかったりしてじゅうぶん音を出せない。
- 歌詞を覚えるのが早く、歌ったり音楽を聴いたりするのが好きである。
- 少し複雑なリズムでも、教員を真似てリズム打ちすることができる。
- ピアノ伴奏が始まると聴くことに集中し、自分は演奏しなくなることが多い。

４　実践

（1）ステップ①（小3～小6）：吹ける音を増やすための取組

ア　使用楽譜　「おんがくのおくりもの３（教育出版）」「子どものためのリコーダー曲集　笛星人（トヤマ出版）」「子どもが輝く指導のコツと楽しいリコーダー曲集１３０（ナツメ社）」

イ　自立活動の授業の中で週１時間程度、個別に取り組む。

ウ　生徒の様子と取組

生徒Ａは、リコーダーを吹いて音を出すことについては問題なく始められたが、手の角度が定まらず、指穴を十分に押さえることができない、指先の感覚が鈍いため、指穴を塞げていないことに気付かない、そして右手の親指で楽器を支えられないという難しさがあった。また、唾液の量が多いため、演奏を長く続けにくく、音を長く伸ばすことができなかった。そこで、まずは右手用の指かけを左手親指の穴（０の位置）のすぐ下に貼り付け、手の位置や角度が定まるようにした。そして、シリコン製のシール（商品名「ふえピタ」）を使用する指穴に貼り、穴の位置を分かりやすくし、穴を塞ぎやすくした。（ドーナツ状の魚の目パッドで代用することもあった。）また、楽器を持つ際に、右手でリコーダーの足部管を軽く握るようにすることで安定して楽器を支えることができるようにした。唾液の問題については、吹く前に唾液を飲み込むよう言葉をかけたり、飲み込んだことを確認してから伴奏を弾いたりするようにし、それを続けることで習慣付けるようにした。そして、音を長く伸ばせるようになるために、頭部管のみを吹く練習を行い、指穴を押さえず、吹くことのみに集中して練習できるようにした。

生徒Ｂは小柄な体格であったため手も小さく、ソプラノリコーダーでは指が届かなかった。また、力が弱いため指穴をしっかり押さえられず、押さえた状態で保つことも充分ではなかった。そして、１音吹くまでに時間がかかり、旋律を演奏することが難しかった。そこで、楽器のサイズが小さく、ソプラノリコーダーとほぼ同じ運指で演奏できるクライネソプラニーノリコーダー

を使用することにして練習を始めた。生徒Ｂも生徒Ａと同じように、右手用の指かけを左手親指の指穴下に、シリコン製シールを押さえる指穴にそれぞれ貼り付けて、楽器を持ちやすく、指穴を押さえやすいようにした。そしてまずは教員の演奏に続いて１小節程度、旋律を演奏することを目標にし、模範演奏を繰り返し聴いてメロディーを覚えることで、吹きたい気持ちを引き出すようにした。

エ　指導の流れ

生徒Ａについては、小学部３年生の１学期の間はまず授業の始めに頭部管のみを吹く練習から始めた。その次に生徒ABともに音出しの曲「リズム」の演奏。この曲はその後もリコーダーを演奏する際に必ず吹くようにし、この曲を吹くことでリコーダー演奏が始まる、という合図にした。また、３音のみで演奏する曲であるため、練習を続けるうちに自信を持って大きな音で演奏することができる曲となっていった。「リズム」の演奏の後に曲の演奏を行い、曲は「シ（O1)」(以下、カッコ内はリコーダーの指番号とする）のみで演奏できるものを選択した。まず「おんがくのおくりもの３」より「シシシでおはなシ」を選択。歌詞で歌うことから始め、それを階名に変えて歌った後、リコーダーで吹いた。その後も階名で歌ってから吹く、という流れで練習を行い、音と運指を一致させていった。その他の使用楽譜「子どものためのリコーダー曲集　笛星人」は、「シ（O1)」のみの曲から始まり、１音ずつ曲に使用する音が増えていく形式で楽譜が掲載されている。「シ（O1)」のみの曲でも３曲掲載されており、リズミカルな伴奏と合わせると１音のみとは思えないほどの楽しい曲となっており、生徒たちも達成感を味わいながら演奏することができている様子だった。曲については、まず教員の演奏やCDの模範演奏を聴き、４小節程度ずつ階名で歌った後リコーダーで吹くことを繰り返しながら、少しずつ覚えられるように進めていった。演奏できる音も少しずつ増やしていき、小学部６年生時には「レ（２）ド（０２）シ（０１）ラ（０１２）ソ（０１２３)」まで増やした。

オ　成果

生徒Ａ、Ｂともに、指かけやシールがあることにより、指穴の位置を確認しやすくなり、穴を自分で探して押さえられるようになった。また、指かけに左手親指を載せるように持つことで正しく構えられるようになった。小学部３年生の２学期以降、生徒Ｂは「シ（O1)」の音のみ、生徒Ａは「シ（O1）ラ（O12)」の２音で演奏できるようになった。生徒Ｂは音を出すまでに時間がかかっていたが、旋律を階名で歌ったり教員の模範演奏を聴いたりした後即座に演奏することを続けるうちにスムーズに音が出るようになり、「シ（O1)」のみを使った曲、数曲を伴奏に合わせて吹けるようになった。生徒Ａ、Ｂともに小学部３年生11月の文化祭では、曲に合わせて音を出し、舞台上で発表することができ、４年生時には学年末に行っている「校内ミニコンサート」で、他学部の生徒と一緒に、「シ（０１)」のみで演奏する曲「笛星人」の演奏を発表することができた。そして、６年生時の「校内ミニコンサート」では生徒Ａは「ひとつの箱」生徒Ｂは「ミスタードラマン」（ともに「子どものためのリコーダー曲集　笛星人」より）を、それぞれ１曲ずつ、ピアノ伴奏に合わせて１人で演奏することができた。音楽室の狭い空間で、本番の緊張感を味わいながらすぐ近くで他学部の児童生徒や教員に演奏を聞いてもらい、演奏後に大きな拍手をもらった生徒たちはとても嬉しそうな表情をしていた。

（2）ステップ②（中１～中３）：独奏曲への取組

ア　使用楽譜　「子どものためのリコーダー曲集　笛星人（トヤマ出版）」「３年生のためのリコーダーBOOK　シングシングリコーダー（トヤマ出版）」「たのしいリコーダーピポピポ（トヤマ出版）」

イ　生徒Ａは音楽の授業後、週１回15～20分程度個別に実施。生徒Ｂは自立活動の授業の中で週１回20分程度、個別に実施。

ウ　生徒の様子と取組

生徒たちが中学部に入学し、教員配置や教科等が変わったことにより、週１回１時間ずつ個別の授業を行うことはできなくなったが、短時間ではあるが確保することができた。小学部の頃と同じように、ピアノ伴奏に合わせて１人で演奏できる曲を増やすことを目標に、個別での練習に取り組んだ。

生徒Ａは、吹く直前に１音ずつの言葉かけがあれば正しい音で吹くことができるが、２音以上伝えると、最後に言われた音だけを吹いてしまうため、階名で歌うことと、１小節ずつのまとまりで吹くことを繰り返し練習した。生徒Ｂは、練習時間が少なくなったためか、小学部の頃に比べて演奏の音量が小さくなってしまったため、演奏を録音し、意欲を持って吹けるようにしたり、録音を聴いて自分の音を確認したりできるようにした。

エ　指導の流れ

小学部の時と同じように「リズム」の演奏から始め、既習曲（10曲程度）を毎回ほぼ全て、メドレーのように続けて演奏した後、その時に練習している曲に入る、という流れで行った。既習曲を続けて演奏する際には、なるべく言葉かけを少なくし、伴奏を聴くだけで思い出しながら演奏できるよう心がけた。また、「1学期に１曲か２曲、新しい曲を吹いて友だちや先生に聴いてもらおう！」と生徒に伝え、１回の練習で吹く旋律の長さを少しずつ増やしながら、時間をかけて取り組んだ。

オ　成果

繰り返し練習を行うことで、週１回20分程度という短時間の取り組みであっても１人で演奏できる曲を増やすことができた。また、既習曲を毎回演奏し、定着を促したことで、教員の言葉かけが無くても前奏を聴いただけで吹くことができるようになった。中学部３年間で、４小節から８小節程度の短い曲も含め、生徒Ａ、Ｂともに15曲の独奏曲を吹けるようになり、レパートリーを増やすことができた。

生徒Ａは、模範演奏を聴いたり階名で歌ったりを繰り返すことで、以前に比べて旋律をまとまりで捉えることができるようになり、旋律が途切れ途切れになることが少なくなった。そのため、どのような旋律を演奏しているのかが聴き手に伝わりやすくなった。生徒Ｂは、録音した演奏を聴くのを楽しみに、ただ吹くのではなく、音を間違えた際に自分からやり直したり、伴奏のテンポに合わせようと自分で速度を上げたりと、音をよく聴きながら演奏していることが伺えるようになった。リコーダー演奏を始めた頃には、伴奏が始まると聞き入ってしまい、演奏が止まってしまっていた生徒Ｂだったが、別の旋律と合わせて吹くこともできるようになり、合奏にも取り組めるようになってきた。

演奏できる音をさらに増やし、生徒Ａは「レ（２）ド（０２）シ（０１）ラ（０１２）ソ（０１２３）ファ（０１２３４）ミ（０１２３４５）レ（０１２３４５６）」、生徒Ｂは「レ（２）ド

（０２）シ（０１）ラ（０１２）ソ（０１２３）ファ（０１２３４）ミ（０１２３４５）」まで指遣いを覚え、曲の中で演奏できるようになった。これまで、楽器を持つ際に右手でリコーダーの足部管を軽く握るようにしていたが、生徒Ａは右手親指で楽器を支えて持てるようになり、生徒Ｂもファ（０１２３４）ミ（０１２３４５）の音を吹く直前に右手を足部管から放し、指穴を押さえられるようになった。また、生徒ABともに指かけを外しても楽器を構えられるようになった。中学１年生時の「校内ミニコンサート」で、生徒Ａは「ブラックホール」生徒Ｂは「ひとつの箱」（ともに「子どものためのリコーダー曲集　笛星人」より）の独奏をそれぞれ発表し、新型コロナウイルス感染防止のために集合してのミニコンサートが開催できなくなった中学部２、３年生時には演奏ビデオ発表という形で、他学部の児童生徒や教員に演奏を聴いてもらうことができた。

（3）ステップ③（高1～現在）：合奏曲への取組

ア　使用楽譜　「子どものためのリコーダー曲集　笛星人（トヤマ出版）」「たのしいリコーダーピポピポ（トヤマ出版）」「中学生の器楽（教育芸術社）」「高校生の音楽１（教育芸術社）」「高校生の音楽２（教育芸術社）」

イ　高等部１年生時、生徒Ａは音楽の授業後、週１回15～20分程度個別に実施。生徒Ｂは音楽の授業の中で週１回15分程度、個別に実施。高等部２年生では生徒Ａ、Ｂともに音楽の授業の中で週１回程度、10～15分程度個別に実施。

ウ　生徒の様子と取組

昨年度は、生徒Ａに関してはこれまでと同じように週１回20分程度の個別練習の時間を確保することができたが、生徒Ｂは音楽の授業の中で行うこととなり、音楽室と他の教室に分かれ、T1またはT2の教員と一緒に10～15分程度練習する、という方法で行った。さらに今年度は、生徒Ａだけの個別練習の時間は無くなったため、生徒Ａ、Ｂともに音楽の授業の中で週１回10～15分程度、個別練習を行っている。中学部で行っていた、「リズム」、そして既習曲を数曲通して演奏することは継続し、高等部では主に合奏に取り組むこととした。合奏については、特別支援学校高等部学習指導要領（平成31年2月告示）音楽の２段階（２）Ａ表現イ（ウ）に、「創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の音などを聴きながら、他者と合わせて演奏する技能」を身につけることが示されている。まずは自分のパートをそれぞれ練習し、その後音楽室に集まり、個別に練習してきた曲を合奏する、という形で行った。生徒Ａは、合奏になると慌ててしまい、フレーズの始めと終わりの音だけ吹くことが多いため、個別にゆっくり練習することが必要である。生徒Ｂは、旋律を覚えるのがとても早いが、その分余裕がありすぎる状態になることが多く、指穴をしっかり押さえなかったり音が小さくなってしまったりするため、個人練習で確認する必要がある。

合奏曲については、「中学生の器楽」に掲載されている「海の見える街」や「高校生の音楽１」に掲載されている「威風堂々」、「木星」、「高校生の音楽２」に掲載されている「ロンド」などを選択した。現在生徒たちが吹くことができる音では、教科書の楽譜そのままを演奏することはできないため、生徒が演奏しやすい旋律に編曲して合奏を行っている。その際、主旋律をなるべく残した旋律となるようにし、また、音の並びにも配慮し元々の曲に近いテンポで吹きやすくすることで模範演奏CDと合わせられるように心がけた。生徒たちが「上手く演奏できた」「最後ま

で吹けて嬉しい」という気持ちを感じられるようにすることを大切にして、旋律作りを行っている。合奏では、練習で自分の音だけを聴いていた時とは違った響きが生まれ、生徒たちはその音の違いを感じて表情を変えたり笑顔になったりしていた。独奏曲の練習も続けており、「たのしいリコーダーピポピポ」に掲載されている「ゆかいなまきば」や「せいじゃが町にやってくる」などの、よく知られている曲を選択し、吹けるメロディーを毎回４小節程度増やすことを目標に練習を継続してレパートリーを増やしている。また、卒業後に１人で演奏を楽しむために、今年度から生徒自身がタブレットで曲を再生する取組を始めた。現在はタブレット画面上のアプリの位置に物理ボタンを貼り付け、生徒たちがボタンを押して再生し、流れる伴奏を聴きながら１人で演奏できるような取組を、音楽の授業の中で行っている。まだ始めたばかりで教員のサポートが必要であるが、時間をかけて取組を続けることにより１人で再生、演奏までできるようになると考えている。

５　まとめ

リコーダーへの取組を始めた当初は、生徒Ａ、Ｂともに１曲の中で１音を数回鳴らすのがやっとで、旋律を演奏できるようになるかどうか分からない状態だった。まずは１音をしっかり吹くことから始め、音楽の授業や自立活動で継続して取り組んできた結果、現在では対象生徒２名とも、伴奏に合わせて一人でリコーダーを演奏できるようになった。また、リコーダーを吹くことに自信を持ち、授業で演奏することを楽しみにしている様子で、「今日はリコーダーを吹きますか。」という質問を教員にしたり、自主的にリコーダーをケースから出していつでも吹けるように準備したりするようになった。旋律を演奏できるようになったことにより、音楽にさらに興味を持ち、曲を聴いた後「この曲はリコーダーで吹けますか。」と発言するようになった。発言があった曲を教員が演奏するのを聴いたり、曲の一部分を自分たちで吹いたりして楽しみ、活動の幅を広げている。独奏だけでなく、合奏にも取り組めるようになり、全体の響きや他のパートの音などを聴きながら他者と合わせて演奏する楽しさも味わうことができている。

今後は、卒業後も生徒たちそれぞれが演奏を楽しみ、音楽がすぐそばにある生活を送ることを目標に、演奏技術向上を目指した取組を継続したい。そして、音楽活動の楽しさを体験することにより、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育み、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培っていけるような取組をさらに進めたい。